
魔王代理人の日頃

霜月ゆのみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王代理人の日頃

【Nコード】

N7432Z

【作者名】

霜月ゆのみ

【あらすじ】

突如、謎の現象に巻き込まれた高校生兼根っからの主夫体質『回座宗谷』は、いきなりの如く常識外れの異世界にたどり着いていた。そして急に課せられた正式な魔王が決まるまでの『魔王の代理人』としての役目。しかし、前魔王から受け継いだ魔核をもつ宗谷は、正式な魔王になる権利があるため、半ば無理やり『国立アーザック王族学院』に魔王候補生の一人として入学させられた。魔王級の魔力を持つが、魔力の扱いは子供以下……こうして彼の非日常の人生がスタートした。

1 巻 事実は小説よりもヤバい

『神隠し』

人間がある日突然、山や森などで行方不明になる現象。

誰もが一度は耳にしたことがあるがこの単語は、実は案外身近に存在しているのではないだろうか。

道端に落ちている石ころのように、隅に生えている雑草のように人はただ気に留めていないだけで、この謎の現象は、当たり前のように起こっているとすれば。

無力な人間は、一体どうすればいいのだろうか。

抗おうとするのだろうか？

打ち勝とうとするのだろうか？

考えるまでもない。

手の打ちようもなくその現象に巻き込まれるのが関の山だろう。

人が消えるのを。

人がいなくなるのを。

呆然と見るだけでお終いだ。

だが、ここで気づいてほしいポイントがある。

『神隠しに巻き込まれた人間は、どうなるか』である。

死ぬ？消滅？

いやいや、なんでもそうネガティブ考えるものではない。

実際に、現在進行形で『神隠し』にあったと思われる俺が生きているのだから間違いない。

俺の考えを教えてやろう。

『パラレルワールド 平行世界の出入り口』

人間には解明しきれないこの世界。

何があっても不思議ではない。

宇宙なんて難問の塊も存在する訳だし。

もしもパラレルワールド平行世界が実在すれば、そのもう1つの世界は一体どんな

ものだろうか。

言語が違うかもしれない、独自の社会構成で成り立っているのかもしれない、文明が飛躍的に発達しているかもしれない、遺伝子そのものの仕組みが違うかもしれない、もしかすれば……なにもかもが……全てがまるで違うのかもしれない。

しかしこの考えは、あくまで俺の推測で、憶測だ。

そう考えないと今、俺がいるこのおかしな世界に納得がつかない。ある意味、この考えは俺を安心させるために俺が勝手に考えた絵空事なのかもしれない。

まあ、絵空事であろうが妄想だろうが、本当の【答え】というものは存外、簡単に知ってしまうのかもしれない。

いきなりですが、ただ今この俺こと回座宗谷かいざそうやは危機に陥っています。

なんと、気付いたらちようど目の前で3人ほどの見ず知らずの方が長い刃物を俺の首元で止めて、動きを封じているのです。

あれ？ 一体どういうことだ？

落ち着け、落ち着くんだ……こういう時こそ慌てず、冷静になつてこの状況を把握するんだ……。

状況説明開始！ 両腕と全身を縛られ、口は布で縛られ声が出ず、謎の薄暗いかなり広い部屋の真ん中でなんか変な服を身に纏った仮面の奴らが1000〜2000人の大群が取り囲みつつ、なんか意味不明な呪文のようなものをかれこれ1時間ほど唱えている。

うん、理解不能。

えっ、何コレ、新手のいじめ？

「~~~~~！」

声を出そうとしても、やはり縛られている布のせいかまったく声が出ない。

現状を把握できない俺を、ひたすら無視するように周りの奴らは一心不乱に呪文を唱えあげている。

新手のいじめなら、俺は教育委員会に駆け込むところだが、雰囲気はどつちかというところとちょっとヤバめの宗教団体だ。

何故このような状況にたどり着いたのか……正直自分でもよくわからなかった。

しかし、覚えている範囲でこの事態になるまでの経過を巡り返そうと思う。

もしかすれば、何かこの現状に至った原因が見つかるかもしれない。

今日、俺は近くの高校に入学したばかりの世間一般でいう高校1年生で、つい先ほど入学式を済ませたばかりであった。

俺の住んでいる場所は、いわゆるド田舎というワードがしっくりくる、辺り一帯のほとんどが田んぼと山。

交通の便は、1日数本しか通っていないバス。

電気製品などほとんど目にしない、かなりのザ・田舎である。

俺はいわゆる天涯孤独というものであり、血縁関係を持った知り合いなど、生まれてこの方会ったことがない。

へその緒がついたまま、ゴミ捨て場に捨てられていたところを、警察が発見。

そのまま一時的に保護された。

だから俺は両親の顔も知らないし、誕生日すら知らない。

一応施設に引き取られ、推測で年齢を決定。

俺は16歳だが、15歳でも17歳でもありえるということだ。

そんな過去を持つ俺だから。

家族という家族が存在しない。

奨学金と、近所の人の手助けもあり、俺はこうして高校生になる

状況を掴めないまま取り乱した。
現状を理解できないまま混乱した。
その瞬間。

目の前で亀裂が走った。

俺は思考が停止した。

別に、たぶんあの時の状態なら、俺は大木に亀裂が走ろうが、大地に亀裂が走ろうが、たとえ海にさえ亀裂が入ろうが軽く驚く程度で済んだと思う。

だが、そんなレベルの話じゃない。

そんな低い次元の話じゃない。

亀裂が入ったのは……空間である。

いきなり目の前で何も無い場所に亀裂が入ったのだ。

全人類の常識から外れている。

まったくもって、分からない。

この意味不明な現象はいったいなんなんだ。

亀裂の周りは、何故か景色が歪んで見えた。

まるで、空間がねじ曲がっているような、世界の仕組みシステムにズレが生じたように。

亀裂は少しずつ、少しずつと、ちょうど大人一人分入れそうな大きさの穴にまで広がった。

俺は6分の恐怖と4分の好奇心で、その穴に歩み寄った。

穴の中は暗い……いや、暗いでは御幣があるかもしれない。

『闇』

ここではそう解釈した方が正しいだろう。

まだ日が十分に昇っている時間帯に、その穴はまるで光が入るのを拒むように、その穴の中は『闇』で広がっていた。

恐らく、地獄というものはこんな場所なのだろう。

なんて悠長な事を考えていたら、吐き気がまた襲ってきた。

俺はその正体不明の『闇』から、逃げるように帰ろうとした。

足を方向転換させ、自分の足で大地を踏み締めようとした……は

ずなのだ。

俺は足で地面を踏みつけられなかった。

穴が……引きずり込んでいるのだ。

吸引というのは少々違う、まるで俺だけを限定した引力のような、不思議な力で穴へと誘導されようとした。

逃げるという選択肢は、完全に無効かされた。

全身に力を入れようとしたときにもう穴の淵。

そして 俺はその穴に引きずりこまれた。

急に、咄嗟に、体を動かす暇も、反応する隙も。

その穴は決して許さず、重力を無視するように、気付けば俺は引きずり込まれていた。

走馬灯が走る猶予さえ与えてくれないその穴は、俺を静かに、一瞬で引きずり込んだ。

意識はまるで眠る様に、抵抗すらできず失っていた。

まあ、そんな経緯があり、俺は意識が戻ると、このような状況にあるわけだが……。

ダメだ、まったく分からない。

そんな考え事をしてしていると、周りの奴らが唱えていた呪文と思われるものが一斉に止んだ。

すると、大群の中から1人が俺の目の前に歩み寄ってきた。

ちょうど俺と間が1mほどの地点に立つと、俺の首元に刃物を向けていた3人組が刃物を鞘に納め、引き下がった。

歩み寄った1人が片手に掴んでいた杖のようなものを上へ掲げ、大群の方へ向きなおした。

「準備は全て終了した。ではこれより、『魔王封印の儀』を執り行なう。各地から集まった名のある高僧達よ。己の全力を尽くし、封印術式を展開せよっ！！」

いきなりだがここで、分かったことが4つある。

1つは、俺の目の前に歩み寄った奴は、声からして高齢の男性と
いうこと。

取りあえずここでの呼称は老人とでもしよう。

2つは少なくとも此処は日本語が通用するらしい。

最初にとある外国の彼方へ拉致されたと思い、低い英会話力でど
う乗り越えるか真剣に少し考えていた自分が恥ずかしい。

3つは、ここにいる人間は聖職者のようだ。

見ず知らずの人間が言った言葉を信じるのもなんだが、「冗談をい
える雰囲気ではない。

先ほど言い出した中二病的発言もおそらく冗談ではない。

4つは……ここでは常識が通用しないということだ。

何故そう思ったか。

そんなのは至極簡単だ。

周りにいた仮面の人間どもが一斉に人差し指で宙をなぞると、ま
るで空間に映像を投影しているように、六芒星や五芒星といった、
漫画やアニメの魔法使いが使ってそうな魔方陣が、宙で組みあがっ
ていくのだ。

トリック？ 手品？ 奇術？

そんなものではない、コレは俺が見る限り、正真正銘の『魔法』
であった。

根拠などは存在しない、だが十分に分かる。

こんなものが、手品なんかじゃできないことくらい。

呆然としながらやや状況に戸惑っている時だった。

目の前に巨大な箱が数十人がかりで運ばれてきた。

んっ？ なんだコレ……？

箱は先ほど運んできた者達が、手際よく次々と解体していった。

フタを外し、側面を壊し、箱は本来の姿を失っていった。

少しずつ、少しずつ中身が見えてきた。

そしてその中身は 人間の死体であった。

「!!!」

箱の中に入ってあったのは、大柄な男であった。

戸惑いが倍増してしまったが、どうやら虫の息ながらも生きていた。

いや、この状態を生きていると言っているのだろうか。

身長は3m以上はある大男が、全身を隠すほどの大量の4mもの巨大な釘で固定され、四肢は削ぎ落とされ、両目は潰され、耳は落とされ、さらには体中に火傷、凍傷、切傷、刺傷……一体どうすればこうなるのだろうかと思ってしまうほどの、怪我を負っていた。

だが生きている。

この男は一体何者なのだろう。

しかし、そんな考えをめぐらす時間もなく突如、周りにいた奴等が詠唱を始めた。

大男と俺は、先ほどの大群が創り上げた眩しい光を放つ魔方陣に、まるで虫を閉じ込めるように魔方陣で四方を取り囲まれ、大男は詠唱と同時に禍々しい光に包まれ、肉体は溶けるようになっていき、小さく紫色の弱弱い光を放つ人魂のようになった。

と、いつかもう常識外の事が起こりすぎて驚くことさえ馬鹿馬鹿しくなってきた。

その人魂のような紫の光はこちらに向かい、なんと俺の心臓部分へ溶け込むようになっていった。

「~~~~~!?!」

激痛、いや激痛なんかで表せるものじゃない。

俺の体に、異物が入ってくるのがしつかりと、気持ち悪いほど鮮明に認識できる。

ジグソーパズルのピースを、まったく違う箇所になじ込んでいるような。

違和感で体が埋め尽くされるような。

死痛。

「~~~~~!?!」

苦しみで悶え叫ぼうが、涙を流そうが。

声は出ず、涙にはなんの意味さえも無かった。

一体なんなんだ!?

ここは何処で、お前らは誰で、何が目的で、俺の体で何をしたんだ!!

「……すまないな少年。だが許せ。我らの正義のため、安らかに逝ってくれ。恨むのなら『迷界』^{アナザー}からここへ来てしまった自分を恨んでくれ」

^{アナザー}迷界!?! 自分を恨め!?!

一体何を言っているんだこの野郎っ!!

しかし、どんなに思考を行おうが、痛みは全身を蝕むように進んでいく。

……死ぬのだろうか。

まあ……別にどうでもよくなってきた。

人間、諦め肝心だ。

16年という短い人生だったが、特に思い返すような走馬灯は存在しない。

このかた俺の人生に幸せというものはあっただろうか。

家族はなく、周りからは哀れみの視線を受け、思い出の欠片もなく。

誰にも見向きされず、関わりを拒まれ、気持ち悪がられ、捨てられた。

頑張っても頑張っても。

誰も俺に関心を寄せてはくれない。

向けられるのは、カスみたいな偽善と、しょうもない同情だけ。そんな。

ただひたすら、生きることのみに執着した人生に。

意味は……あっただろうか。

……幸せになりたかったな。

「生きたいのか?」

！？

突然、誰かに声をかけられた。

周りにいる奴等ではない。

それだけは言える。

断言できるのだ。

その声は、まるで直接脳に伝えているような、不思議な感覚であった。

「生きたいのか？ と、聞いてるんだよ。 さっさと答える糞子^{ガキ}供がっ」

口は悪かった。

しかし低く、重圧感のあるその声は、ひたすら俺の脳へと伝えられていく。

どこか恐怖を…… 畏怖さえも感じさせられるその声は、鮮明に俺の元へと届いてくる。

生きたい…… いや、死にたくはないけど、生きる意味も特にな…… な。

「そうか、なら遠慮なくその体を使役させてもらっわ」

刹那、俺の体から痛みが消え、逆に力が湧き出てきた。

いや、力という簡単な言葉でかたつけていいのだろうか。

全身から今にでも放ちたい、この膨大の力を。

俺は…… なんといいばいいのだろうか。

何処からやってきたかも分からず、泉が湧き出すように、急に内部から放たれたこの力を。

縛っていた縄を強引に引きちぎり、布を取り、豪快に立ち上がった。

…… んっ？ 体が勝手に…… 動いてる？

それと同時に、今まで俺を囲んでいた魔方陣が、光の砂のように綺麗に散っていく。

「……！ ど、どういうことなのだ！？ 術式が…… 崩れていく！？」
俺の目の前にいた先ほどの老人が、宙に描かれていた光の魔方陣

が消えていくのを、焦りながら見ていた。

「なあに、焦んなよ糞野郎共。単に『生体を別生体を生贄にして双方を完全消滅させる』という高位禁魔法も、その生体が先に死んでしめえば、そりゃあ誤作動も起こすわな」

口が、勝手に!?

「ど、どういうことだ! お前……一体その人間に何をしたっ!?!」
先ほどの老人は、顔にはもう恐怖と混乱しかない……追い詰められた果ての表情を残しつつ疑問を投げつけ始めた。

「ああ、どうせ後先短いことは分かってたしなつ。どんな強大な魔力を持っていようが、さすがに350年は生きすぎた。肉体も精神もへとへとだ。だから決めた。この子供に吾輩の魔核^{スキル}を全て移してやるんだ。我ながら面白いことを考えたと思ってるよ」

「なんだと……! ま、待て!」

「いや、もうお前うぜえから黙れ」

俺の手(いや、勝手に操られているのだが)が老人に軽く触れると、老人はありえないほど遠くまで吹っ飛び、壁に衝突した。

「少々、眠つといてくれや。さてさて、おい子供^{ガキ}、聞こえてるか?」

聞きたくねえけど聞こえてるよ……。

「そうかいそうかい(笑)、まあ良い。取りあえず、今さつきお前に吾輩の全魔核^{スキル}をくれてやった、感謝して受け取れ」

はっ!?! 魔核^{スキル}!? 一体なんなんだよっ! 何の話なんだよっ
!?!

「まあ落ち着け。まだ『迷界^{アナザー}』から来たばかりで混乱してると思
うが……。取りあえず、手筈なら吾輩の部下がもうすぐ来る。説明
は全部そいつに聞け、魔王の代理人(笑)」

だ、代理人……?!

「ふむ、さすがにそろそろ限界だわつ。……じゃあな、子供^{ガキ}」
!?!

体が急に軽くなった。

と、というか元の状態に戻ったと言えはいいのだろうか。

体中を縛っていた鎖が、切れたような感覚だ。

おお、やっと自由に……！！

そんな感傷に浸っている時だった。

頭上から爆音が轟いた。

上から美少女が降ってきた。

……………。

いや、違うよ？

別にアニメであるような、『お空からかわいい女の子が落ちてきた』みたいな可愛いものではなかった。

片手には俺の身長ほどある大剣、首から上以外は鋼色に輝く鎧に包まれた身なり、異常なまでに整った顔立ちと、腰まではあるう絹のような黒髪をなびかせ、悠然と俺の前に立ちばかった。

クールな無表情と、どことなく侍のような雰囲気を感じさせる彼女は、美しく、凜としていた。

……………あれ？ 確かここ室内……………。

上を見ると、やや予想通り、天井が見事に大剣で破壊されたような巨大な穴があり、そこからは満点の星空が綺麗に広がって見えた。わー星がきれい。

そんな軽い現実逃避を、現実には許さないように、俺を引きずり戻した。

いきなり侵入した女は俺を見つけると、いきなり胸ぐらをつかんできた。

「……………貴様が『代理人』か……………。魔王様も運が無いな、このような貧弱でいかにも間抜け面をした男を引き当ててしまうとは……………」

口の悪い女は、そう言い残すと体が紅蓮の炎によって消し炭となった。

おそらくは少年に吐いた暴言に、神は激怒したのだろう。

「語り部を捏造するな」

ぐはっ！ なんて美しい関節技……………！

「時間が無い、さすがに私でもこの人数は骨が折れる」

「奇遇だな、俺もこのままだと右腕が折れる」

いつまで関節技を決めているつもりだっ……骨がミシミシと悲鳴を上げてやがる……。

「では逃げるぞ」

そう言い残すと、謎の女は俺をひょいっと軽々と片手で持ち上げ、なんと5m以上あつた天井の穴まで飛び上がったのか。

人間じゃねえなこいつ。

絶対何処かの戦闘民族だよ、尻尾はないけど。

「に、逃がすと思うか！ 全員、術式展開準備っ！」

中にいる奴らが一斉に構えだし、またもや魔方阵が次々と現れているが、おそらく無駄だろう。

理由？

俺の目の前には巨竜ドラゴンがいるからだ。

某有名ゲーム風に言うならば、『ドラゴンが現れた！』みたいな頭には3本の角が生え、巨大な2枚の羽根を揃え、一体全体何mあるんだよと突っ込みたくなるほどの巨体で待機していた。

「きよ、巨竜ドラゴン！？ 何故そのような生き物がここに……！？」

「答える義理はない」

そう女は言い残すと、俺も（無理やり）乗っている巨竜ドラゴンが勢いよく、その巨大な2枚の羽根を羽ばたかせ、夜の夜空へと舞い上がった。

舞い上がったと思えば、一瞬景色が消えて見えるほどのスタートダッシュで移動し始めた。

「安心しろ、にゃん太郎は他の巨竜ドラゴンとは桁違いの速度スピードを誇っている。まず追いつかれることはない」

「にゃん太郎？」

「この巨竜ドラゴンの名前だ、私がつけた」

ネーミングセンスは0だった。

気付くと、先ほど俺がいたと思われる建物はすでに小さく遠のいていた。

建物は小さくなったとはいえ、この距離でも分かるほど巨大で立派な造りの赤褐色の建物だった。

一体、俺はあそこで何をされ、何がおきたのだろうか……。それはそうとも、巨竜ドラゴンの物凄い速度のせいかな普通に息苦しいし喋りづらい。

それに、この常人なら気絶しそうな高さであまり驚かないのも、今日だけでも驚きの連続で、驚き疲れた……。みたいな感じだ。

風がなびき、ただひたすらに巨竜ドラゴンに乗りながら、前へ前へと進んでいる時だった。

いきなり俺の目の前に現れて、俺をさらっていった彼女が俺に視線を向け、至極真面目な表情で口を開いた。

「さて、そろそろ話そうか。何故お前がここにいて、ここがどういう世界か。そして、これから何が始まるか……。聞く準備は良いか？」

『魔王の代理人』」

1 忒 住めば都か魔王城？

『常識』

一般の社会人が共通に持つ、知識・意見や判断力を指す言葉。

意味の通りに見ていくと、常識とは人間の当たり前だと思っ
てい
ることを言っている。

だが、常識とは人によって変わるものだ。

変化し、移り変わり、変わりゆく。

必ず、人個人の常識をみんな持っている。

簡単な例をあげると、『卵焼きにはケチャップ』という人もい
れば『卵焼きには塩コショウ』という人もいるだろう。

まさしく十人十色、千差万別、多種多様。

だがしかし、個人の常識というのは、個人の価値観にも繋がっ
て
しまうのではないだろうか。

『こういうのが良いらしいから、こういうのが良いんだ。』

そんな子供みたいな戯言を吐いてしまう原因は、常識が価値観を
創り上げているかもしれない。

だから語り部の俺から読み手に伝えよう。

これから語るこの『常識』を。

既存の『常識』を全て捨てて。

受け止めてほしい。

この世界では『常識』なんて、何の意味も果たさないし、この世
界の常識は、既存の知識を驚かせる。

冷たい風が吹く抜く中、俺の前に突如現れ、そして連れ去った謎
の女が、長い黒髪を靡かせながらもそのポーカークフェイスを保ちつ
つ、ゆっくりと口を開いた。

「先に自己紹介だ。私は十乃字小夜。歳は16、特技は剣術。好きなものは甘いもの。嫌いなものは下衆な人間だ」

最初に彼女の口から出た言葉は、普通の女の子(？)らしい自己紹介だった。

案外、話の通じるやつなのかも知れない。

「俺は回座宗谷。同じく16歳で趣味は料理。好きなものはこれと
いってなし。嫌いなのは汚い場所」

「男のくせに料理とは女々しい趣味だな。好きなものがないとは個性がないのかお前には。汚い場所が好きな人間はいないし、後、私を呼ぶときは十乃字と呼ぶように」

役7秒弱で俺の自己紹介は貶された。

汚い場所が嫌いというのは潔癖症という意味合いでいったつもりだったんだが……。

まあ、後は否定できないな。

「それは置いといてだ。で、本題に入ろう。まずここは何処なんだ？」

「日本だ」

簡単な返事が返ってきた。

……はっ？

「ジャパンだ」

「いや、言い換えなくていいよ」

「より詳しく言うのなら、ここは日本の三河辺りだな」

「み、三河？」

三河って確か今の愛知県の旧名……だったけな。

中学生の頃にならった記憶がある。

どういうことだ？

俺はあの『闇』に引きずりこまれた後、タイムスリップしたという
ことか？

魔法みたいなのを普通に使っている世界だ。タイムスリップがあったて不思議じゃない。

よし、すこし質問をしてみるか。

「なあ十乃字、パソコンって知ってるか？」

「ぱそこん？ なんだ？ 刀の名前か？」

よし、タイムスリップかこの女が物凄い馬鹿なのかの2択になった。

そう考えると思い当たる節もある。

先ほどから巨竜ドラゴンの上で景色を見るにしても、森林が多く、ビルなどの高僧物などは見当たる気配もない。

夜なのに街明かりなどは全く見られない。

十乃字が言ってる通り、ここが三河……愛知県だとしても、こんなに田舎ではないと俺でも分かる。

しかし、過去に来たということ肯定すると、昔、魔法のような不思議な力が実在していたという話になる。

実在していたならば、何故現在にはないのか。

教科書にすらそのような事実が載っていないのか。

様々な疑問点が浮かんでくる。

「『パラレルワールド平行世界』」

「はっ？」

いきなり十乃字の口から飛び出てきた言葉は、俺の思考していた考えとはまったく違う単語であった。

「この世界は、実は1つではなく、もう1つ平行している世界がある。その2つはまったく同じ様に、文化も、科学力も、人の数も顔も性格も。まったく同じ世界がある」

十乃字はおもむろに、訳のわからないことを語りだした。

一体その話が何の関係があるんだ……。

「だが、ある時。片方の世界で誤差が発生した」

「誤差？」

「隕石が落ちてきたんだ」

隕石？ あの宇宙の方の？

「その隕石はかなり巨大なものだった。数々の国ががまるまる消え

るほどにな。だが、恐怖する点はそこではない、その隕石といつしよに飛来してきた『何か』だった」

「『何か』？」

「そう、『何か』だ。全てが不明。全てが未知。ただあったという存在しか分かっていない『何か』。その『何か』は片方の全ての有機物、無機物に激しい影響を与えた。生命体の突然変異、無機物の効果の変化。誤差は誤差を生み、その誤差は更なる誤差を生みだした。新エネルギー、新生物、新人類。その結果、2つの世界はまったく違う世界と変貌してしまったのだ」

……だんだんと、自分が何処にいるのかが分かってきた。

分かりたくもないが、現実を受け止めるのが大人というものだろう。

「つまり、俺は片方の世界から、このもう1つの世界へ来てしまった……」

「『ご名答。私たちはそっちの世界を『迷界』^{アナザー}って呼んでるがな」
『迷界』。

確か俺が捕まっていた場所にいた老人が言っていた単語だった。

「基本的に、2つの世界は干渉し合わずに時間を経ているのだが、たまにあるのだ。2つの世界を？ぐ出入口が出来上がることが」

出入口、つまりあの時俺が見た『闇』だろうか。

「こつちの世界で高エネルギーを発生させると、2つの世界を隔てる境界線を歪ませてしまう。そして、その歪みから出来た出入口を通過するともう1つの世界に行けるわけだ。まあ、稀な現象だから、こつちの住人がそっちに行くとはほぼ確実にこつちには戻ってこれないのだ。もう1つの世界を、まるで迷路に迷う様に。だから『迷界』^{アナザー}。そして、その世界から出入口を通り、やってきたのがお前ということだ」

「……マジかよ」

「アジだ」

「いや、字面は似てるけど勝手に魚類にするな」

「ちなみに、こちらの世界から迷界へ行った奴らは、超能力者、化物とか呼ばれているそうだがな」

なるほど、そう考えると、神話や日本の文献にもあるような、人外のものは、こっちの世界から来たということなのかもしれない。おとぎ話みたいな話だったが……いや、まだおとぎ話の方が夢がある。

正直、まるで道化師に騙され続けているように、詐欺師に欺かれ続けるように。

俺はその話を聞いても、納得したようで信じられない。

まあ筋は通るだろう。

どんなことだろうが、過程が変われば結果が変わる。

この世界はどうやら、地形なんかは基本的には同じみただが、土地の名前、文化の進み具合、生物の種など、様々なものが違うみたいだ。

「丁度お前も見ただろう。お前が捕まっていた所は何千人もの高僧たちが、1人だけでもかなりのエネルギーが必要になる禁魔法……その高位クラスのをあれだけの人数で行ったら、出入り口ができるほどのエネルギーにギリギリとどく可能性がある」

それでもギリギリとは、本当に稀な現象みたいだ。

そして、その稀な現象に俺は巻き込まれてしまった……つと、いう訳か。

「……俺もついてないな……そんな出入り口に出くわすとは」

「まあ、あの現象を起こしたのは魔王様のせいみたいなものだからな」

「起こしたのは？　つまりその魔王様のせいで俺はここにきたと？」

「ああ、そうだ」

「で、お前のいう魔王様っていうのはもしかして俺がいた場所にいる大男？」

「恐らくその方だ。日本国王第76代目魔王、無間蛻様。先程、お前に魔核を授けて逝かれたがな。で、私はその無間様の直属の部下

で、色々と良くして貰った」

「なるほど、部下……。だけど簡単に逝かれたって言うけど…

…その、なんだ……。悲しくないのか？」

「ないな」

断言しやがった。

もうキツパリ言い過ぎて、逆に清々しいというか男らしい。

「と、いつて実は影で泣いてたんじゃ」

「この足は折れたいらしいな」

「すみません、全力ですみません」

この女、俺を反応する隙さえも与えず四の地固めに持ち込みやがった。

今日2回目の骨からのS Sが全身を伝っていく。

というか、今乗っている巨竜ドラゴンがいくら巨大でも、こんな足場が悪
い所でよくこんなスピーディーに動けるな……。

四の地固めは、俺の必死な謝罪によつて解放された。

「まあ、元々ご自身でも『吾輩もそろそろ限界だしな』。仕方ない、
何か面白いことでも探しに行くか』と前々から呟いておられたし
な」

軽いな魔王……。

というか、何が仕方ないんだよ。

「そこで、魔王様が思いついたのが『魔王の代理人』探しだ」

「『魔王の代理人』……。確か俺も魔王にそんな事いわれたなっ…

…あつ、もしかしてさっきの『魔王様のせいみたいなもの』ってのは、
魔王は2つの世界を？げるのに一役かかっていたってことか？」

「そつだ。ご自身の死期を悟っておたれた魔王様は、予め『魔王の
代理人』となる人間……。つまり迷界アナザーの人間を呼ぶために、わざと敵
国の人間に捕まり、高僧達を呼ばせ、そして大量のエネルギーをご
自身の力を加えて出入り口を作ったのだ」

「敵国？」

「この国では、『魔王』というのは役職の様なものだ。国の政治を

担い、常に国のために行動し、全ての決定権を持つ絶対の王。それが『魔王』だ」

「いや、別に普通に王で良いんじゃない……」

「仕事がそれだけならな。魔王の仕事は他にもある。例えば……戦争とかな」

「せ、戦争？」

「国の領土争いは深刻な問題だ。この世界には『侵略者』という戦闘型の国と『平穩者』という非戦闘型の2種類の国におおきく分かれる。侵略者は領土を奪うため、兵器を量産し、軍事力を高め、次々と他国を侵略していく。平穩者も領土を守るために、自国の軍事力を高める。しかし、兵器や武器といつても、弓や刀、最近広がってきた火縄銃はあまり使われない。理由は簡単。争いで勝利の鍵となる、兵器をも凌ぐものが存在する。それが『魔法』だ。お前の世界には無いらしいが、この世界は在りとあらゆるものには『マナ』、別名『魔力』と呼ばれるものが含まれている。人間にも、虫にも動物にも。エネルギー体なのか、未知の物質なのか。まだ完全に解明しきれていない『マナ』だが、人間はその『マナ』を操作する『魔核』を携えている。魔核は優れば優れているほど、その外部の『マナ』を操作できる量が決定される。そして、『マナ』は人間によって変換・操作され、魔法となるわけだ」

「先生、頭が痛くなってきました」

「お前、折られるなら何処がいい？」

「と、思いましたけど頑張ります」

この女、本気で折るつもりだったぞ……。

目が本気だ。

「よし。では続けよう。で、その『マナ』と呼ばれる魔力を大量に操れるほどの魔核を持つ、魔の王。つまり巨大な力を持つものこそが、魔王になれるわけだ。そして、前魔王、無間様は過去に例をみない、強力な魔核を持っていた。全力をだせば1人で1つの国をも滅ぼせるほどにな」

おお、あの人そんなに凄い人だったのか……。

ん？ そういえばその人の魔核^{スキル}って……。

「もしかして、今その魔核^{スキル}ってのは……」

「もちろん、お前が受け継いでいる」

……予想通りだった。

「なんで俺が持つてるんだよ！！　というか受け継げるものなら他のやつらに継がせるよ！！」

「それが出来れば苦労はしないし、だからお前が呼ばれたんだ。魔核^{スキル}はこの世界の人間なら誰でも持っているもの。魔核^{スキル}は本来、受け継げるものじゃない。誰かに授けようとしても、どうしてもその人が持つている魔核^{スキル}が邪魔になる。だが、魔王様は考えた。『そうだ、もう片方の人間を適当につれてきて継がせちやえばこの国安泰だな』と。確かに、もう1つの世界の人間は、魔核^{スキル}を生まれつき持つていない。ならば拒絶^{拒絶}反応も起こさず、すんなりと継げるわけだ」

「な、なるほど……」

分かった様で分からない。

と、というか話が難しくてややついていけない。

「あくまで魔王というのは、他国に自分たちの領土を攻めさせないようにするための脅しの象徴みたいなものだ。基本的には争い事のような役割は無い」

「よかった……」

「まあ、暗殺はされるかもな」

「ダメじゃん！」

なんで暗殺されなきゃいけないんだよ！？

「そして、その魔王にお前が代理を勤める訳だ」

「いやだぁー……あれ？　ちよつと待てよ……。何故『代理』なんだ？　流れだと就任くらいいくかと……」

ある意味、俺は魔王の後継者みたいなものだ。

おいおい、^{タイトル}題名を変更しなければならぬじゃないか。

これからは『魔王の後継者』で再スタートしないと……。

「愚か者」

一喝された。

「魔王は魔核^{スキル}、知識力、精神力などなど、総合的な力を見て決定するものだ。お前以外にも候補生はいる。本来、候補生から次期魔王を決定し、正式な手続きが終わり次第、現時点の魔王が引退し、次期魔王が正式な魔王となるのが、正しい順序なのだが……。今回は現時点の魔王が死んでしまうという事態にいたったため、次期魔王が決まるまで、代理が必要な訳だ。つまり、その間は」

「俺が代理……つと」

「そう。まあ妥当な判断だろう。無間様ほどの魔核^{スキル}を受け継いでいるものだ。政治はともかく、他国を恐ろしめるくらいはできるだろう。一応、代理でもあるが、無間様の魔核^{スキル}を継ぐ者として候補生にもなるだろう。候補生等が通う学校にも通ってもらおう」

「この世界に来てもやはり学校は行く運命だったか……」。

「……と、いうことは正式な魔王が決まったら俺は代理人から解放され自由？」

「まあそうなるだろうが……。いいのか？」

「なにが？」

「候補生である間は費用は国から出るため、衣食住には困らず、更に魔王になれば元の世界に戻れる機会があるかもしれない。しかし、候補生を終わり、正式な魔王になれば、一生この世界で身分不明の人間で、職にもつけず、餓死するしかないぞ？」

「ぬっ……」

「この女、俺を脅しているのか……」。

確かに今の俺の所事物は、現時点で来ている衣服と、ポケットに入っていた、高校でPTAがお祝いに配布していたプチホットケーキというお菓子オンリーだ。

これだけでこの世界を生きることなんて到底不可能だし、まして魔王になれば元の世界に戻るチャンスも巡ってくる可能性が0でもない……。

「そういうことだ。まだ分からないことがあれば自分で調べればいいし、これからはしっかりとこっちの学園にも通ってもらおうしな」

現時点でおかれている状況は、大まかだが理解できた。

疑問点もいくつかあるが、それはまた別の機会にでも調べよう。だが、まだ1つ。

1番気になる、疑問点が存在した。

何故、この女がそんな事実を知っている、ということだ。

平行世界の存在を知り、様々な知識を所有し、全てを分かり切ったような語り口調で、俺に色々なことを教えてくれた。

まるでプレイ中のチェス盤を眺めているように。

どんな事をも知っているように。

何にせよ、十乃字小夜。

本当に謎だらけの女であることは間違いない。

「そろそろ着くぞ、振り落とされるなよ」

「はっ？」

考え老けていた俺を構わず、十乃字はそう言い出すと、巨竜がフリーフォール真つ青の速度で急降下していった。

「ぎゃあああああああああつあつあああ！？」

物凄い速度で急降下。

取りあえず巨竜にしがみつき、振り落とされないようにしていたが、あつという間に地上に降り着いた。

巨竜が着地した辺りには、砂埃が舞い、しばらく周りが見えなかった。

しだいに視界が良くなり前を見ると、そこにはいかにも魔王が住みそうな禍々しい城があった……訳ではない。

むしろ普通の城……というのも何か変だが、そこには俺の知っているような、和風の城があった。

俺の知識から例を挙げるとなると……外見や造りは姫路城にちかい。

空に向かって建ち並ぶ天守群と白く美しい白壁が広がり、天を舞

う白鷺のように見える、別名『白鷺城』と呼ばれる、あの姫路城に。

巨竜を降りれば、十乃字は普通に言った。

真顔で、変化の無い声で。

「ここが今日からお前の城だ^{いえ}」

俺の嫌な予感レーダーはびんびんであった。

1 - 参 魔術は長く人生は短し

『平行世界』というが、途中で片方の世界の『平行』^{バランス}が崩れてしまい、まったく違う世界になってしまえば。

その世界は別世界と呼んでもいいのだろうか？

今現在、俺がたどり着いてしまったこの世界はまだまだ俺の常識を覆していく。

もう、これは別世界と認識しようと思う。

^{ドラゴン}巨竜が存在し、魔法が使用され、文明に至っては滅茶苦茶だ。

土地の名前はまだ旧名、移動は基本的には馬、電気製品などは存在しない、武器といえば弓や剣（十乃字曰く火縄銃も最近広まってきただとか）などの野蛮なもの。

魚は地上では生きられない。

環境が変われば誰だって変化をおこす。

その俺の変化を笑って見てくれれば。

まだこの笑い話は御の字だ。

笑い話がどう変化するのも。

語り部の俺の知ったことではないのだけれども。

「言語や地形は基本的には同じ……文明はこっちの方が数段落ちてるみたいだな……魔法の研究の歴史はかなり深いな……。魔法を重視した研究ばかりで科学の方が疎かになったのか……？」

薄暗い部屋の真ん中。

椅子に腰を掛けながら難しい表情を浮かべ、顎に手を置いているのが、こんにちは。

回座宗谷です。

俺はいきなりの新たな新居こと、この魔王城に住むことになった

のが…。

この城は代々、魔王となったものが職場兼住居として受け継がれている、名誉と伝統ある城らしい。

城内はかなり広く、内心、案内板でも立てるや！　っと、突っ込むほどの広さだ。

そして、俺は城内の一角に存在する『ブックルーム書物室』でこの世界についての情報を、とにかく何でもいいから調べつくした。

一般常識、文化、食糧、生物、歴史、科学、金銭、哲学、思想、そして『魔王』についても。

一冊読んでは二冊目、三冊目と次々と読み荒らしていった。何でも良い。

とにかく情報が欲しかった。

この世界の知識が欲しかった。

人間は、『分からないもの』が一番恐ろしいのだ。

昔の人々は、雷や大雨、災害や疫病など、分からないものとにかく正体を勝手に創り上げた。

雷は雷神、疫病は疫病神ってな感じに。

鬼や幽霊もそうだが、実際問題、これ等は怖いものではなく、怖さを和らげるものなのだ。

今の俺も昔の人々と同じだ。

この世界が分からない。

まったく理解できない。

だから理解しようとする。

俺は昔の方達のように、仮定の存在などは創り上げない。

ただただ、情報を吸収していくまでだった。

「ほお、随分読んだのだな」

ふと、そんな声が後ろから聞こえ、振り向くとそこには俺をここに連れてきた張本人、十乃字小夜がすまし顔で佇んでいた。

「そりゃ、この世界で生きていくんだ。それなりの知識が必要だろ」

別段、俺は本を読むのが嫌いというわけではない。
むしろ好きな方だ。

暇な時があれば、よく本を片手に教室に残ったものだ。
もちろん、お金は使わず廃棄されている本を拾ったのだが。

「確かに、『魔王の代理人』になるんだ。それなりの教養は必要だ。
しかし、外を見てみる」

「外？」

俺は椅子から立ち上がり、書物室の壁側にある出窓のカーテンを
勢いよく開いた。

日の光が部屋を満たさんばかりに差し込んできた。

「……………oh, morning……………」

もう朝だったのか……………。

十乃字にこの城に連れてこられてから、俺はほぼずっとこの書物
室で本を読みあさっていた。

連れてこられた時、時計を見たときはまだ10時だったため、俺
は12時には寝るつもりで読んでいたのだが……………。

「その様子だと寝ていないようだな。まあ、良い。どんなコンディ
ションだろうと、死ななければ問題ない」

「俺には問題大アリだがな」

こいつ、俺をなんだと思ってるんだ。

「兎にも角にも、今日からお前にも学校に行って貰うからな」

「はっ？ 確かに学校には行くと聞いていたが、もう行けるのか？」

「昨晚の内に手続きは済ましておいた。教科書一式は、担任となる
教師から受け取れ。制服は貰っておいたから、後で着ろ。サイズは
こっちの目測だが問題は無いと思う。」

何気に敏腕なやつだった。

「では、早く食堂に來い。朝食なら用意しているからな」

そういうと、十乃字は規則正しい足音を響かせて、書物室から出
て行った。

おお、朝食を作ってくれたのか。

何気に嬉しい自分がここにいた。

ここで、この城の説明をしようと思う。

この城にある部屋は、寝室が客用合わせて10室以上。

どこぞのホテルかと突っ込みたくなる厨房。

パーティー会場並みの食堂。

様々な書物を保管している、俺が現在いる書物室。

あとは巨大な庭園などなど。

俺が現時点で把握しているのはこんなところだ。

まだまだあると思うのだが、何分、この城は巨大すぎて分からない箇所が多すぎる。

まあ、その内分かるだろう。

「さて、一徹くらいなら大丈夫だろうし、食堂にいったって朝食を済ますか」

書物室から出、長い廊下を渡っていき、数回階段を下り、巨大なドアを開け。

階段を下り、塔から塔へ繋がる橋を渡り、巨大なドアを開け。

右へ曲がって、今度は階段を上がって、直進して。

……………遠いよ！

なんでこんなに広いんだよ！

そんなこんなで、やや走り、少々息を乱しながら食堂に到着した。

「おお、来たか。時間はまだあるが、さっさと食ってしまえ」

十乃字は先に食事をしている最中であった。

大きなテーブルに、俺の分と思われる朝食の皿が置いてあった。

メニュー、パンが1つ。

……………。

十乃字に視線をやると、気にしないようにパンを頬張りながら新聞を読んでいた。

「…………… あっ……………これしか無いのか？」

「材料はある。しかし、随分前に召使いやコック達が辞めてしまつてな」

そういえば、この城は一応魔王が住む所。

実際はコックやら召使いなどが大量にいてもおかしくはない。

「なんで辞めたんだ？ 給料にでも問題あったのか？」

「魔王様……無間様が怖かったとか」

ああ、納得。

巨体で、口が悪くて、群を抜くスキル魔核を持つ魔王となれば、そりゃあ怖いわ。

仕事どころか恐怖で体調崩すな。

「さすがにパン1つじゃな……あっ」

俺は懐に入っていたミニホットケーキを見て、厨房に向かった。

厨房は食堂から比較的近く、目と鼻の先にある。

着くと、俺の第一声はこうだ。

「汚なっ！？」

厨房は凄いことになっていた。

流し台に散乱している洗われなのまま積み重なっている食器。

清潔感など微塵も感じさせない汚れた壁や床。

ゴミ箱には虫がたかっている。

「十乃字……掃除もできないのか……」

苦い表情をしながら顔を引きつらせ、俺は取りあえず厨房から材料を探してみた。

まあ、ご察しの通り何もなし……と、思いきや。

厨房の床に、小さな鉄の扉があった。

「……？」

なんだコレ？

俺は両手を扉のつがいに手を置き、精一杯引っ張ってみた。

開くと、そこは地下に繋がっている入り口であった。

「つて寒！？ な、なんだここ……」

入り口からは、溢れださんばかりの冷気がこぼれ出していた。

俺は取りあえず、地下へいくために設置されている梯子を下って行った。

そして、かなり長めの梯子を下っていくと、そこは食糧の倉庫であつた。

冷蔵庫並みの温度で、さながら自然の冷蔵庫といったところか。

「卵、小麦粉、牛乳。なんだ、割と揃つてるな」

俺は必要な材料を、近くにたくさん置いてあつた麦わらの籠に入れ、梯子を上つた。

「よし、一応ホットケーキが出来るくらい材料は一通り揃つてるな……」

必要な器具も材料も準備完了。

ここからはいよいよ俺の腕の見せ所だ。

卵に砂糖を混ぜ、溶かしバター、牛乳などを混ぜ……。

小麦粉をふるって、粉っぽさがなくなるまで更に混ぜ……。

フライパンに薄くバターを塗り、温める。

そして、温まつてきたフライパンの底を濡れ布巾で冷やす。

弱火にして、生地を入れ蓋をする。

ふつつつとまわりの色が変わってきたら、クルリとひっくり返す。

そして、焼けたらフライパンから取出し、皿に移して好みのシロップをかければ完成つと。

ちなみに、今回はリーズナブルにメープルシロップだ。

しかし……やや多めに作りすぎてしまった。

まあ良いか、たまにはこんな朝食も悪くはない。

そう思いながら6枚ものホットケーキを、2枚の皿に3枚ずつ盛り付け、シロップをかけていくと、思わぬ方が後ろから見ていた。

いや、この表現だと今気づいたみたいになるな。

正しく言うならば、俺が焼き始め、香ばしい香りが漂ってきた辺りからその方はいた。

クールビューティー十乃字さん、その方が。

なんているんだ……。

そう疑問に思うと、あることを思い出した。

十乃字が自己紹介してきたとき、確かにコイツは甘いものが好き

といていた。

「……まさか、食べたいとか？」

「あの〜……十乃字さん？」

「……！」

十乃字は驚いた猫のようにびつくりし、後ずさった。

「……気づかれてないと思ってたのか。」

「い、いやなんだ。厨房にお前が行くのを見てな、ほら、料理をす
ると思っただな。料理は火や刃物がつきもの、お前だけじゃ何かお
こしそつで心配して見に来てやったのだ！」

「俺は子供かいな」

「というか十乃字、よだれが垂れてるから早く気付いてくれ。」

「そ、それよりその得体のしれない食べ物なんだ！」

「んっ？ ホットケーキだが？」

「ほつとけーき？」

「もしかしてこつちの世界には無いのだろうか……。」

「俺の世界……お前らのいう迷界アナザーにある食べ物だよ」

「あ、甘いのか？ メープルシロップをかけていたが……」

「まあな。………食べたいのか？」

「た、た、た、た、食べたい訳ないだろう！」

怒鳴られた。

赤面しながら。

堅物なやつだと思っていたが、中々に可愛い所があった。

「ここは軽く悪戯をしてやろうか。」

「そうかそうか、食べたくないのか。残念だな〜、ふわふわの舌触
り、香ばしい香り、ほのかで上品な甘みが口一杯に広がる、とー
ーっても美味しいものなんだけどな〜。一口食べたら忘れられない
味になること間違いなし。こんなに甘くて美味しいものがいら
ないんだ〜」

俺は盛り付けてある2皿を両手で運びながら、自慢げな口調で十
乃字に語り掛けるように食堂に運びながら歩いた。

「~~~~~！」

十乃字は軽く涙目になりながら、何かを言いたそうに口を尖らせ、頬は朱色に染まっていた。

「うわー……相当食べたいんだな……。」

「……………食べたい？」

「……………」

「ついにだんまりだ。」

十乃字は食堂の先ほど自分が座っていた席に座ると、拗ねるように新聞を読み始めた。

「……………はいよっ」

俺はもっていた片方の皿のホットケーキを、十乃字の前のテーブルに置いてやった。

「！……………私は欲しいなんて一言も言っていないぞ……………」

十乃字は一瞬驚きと嬉しさの顔で満ちたが、すぐに強情を張って新聞に視線を向けた。

「強情を張る前に早くよだれに気づけ。」

「……………そうか、実は多めに作りすぎたから食べるのを手伝って欲しかったんだけどな。仕方ない、自分で食べるか」

ちよつとした演技を見せるが、これでは分かりやすすぎて逆に怒られるだろうか。

「完全に棒読みだった。」

「自分でも呆れるほどの大根役者っぷりだ。」

俺は皿を取る様に片手を十乃字の前のホットケーキに延ばすと、十乃字は素早い動きでホットケーキの皿を俺から守る様にして取り上げた。

「例えるなら獲物を死守する獣だろうか。」

「し、仕方がないなお前というやつは！ 私も鬼ではない！ 嫌だが！ 本当に嫌だが！ 慈悲深い心で私が食べてやるうじやないか！」

「……………そんな嬉しそうな顔で言われてもな……………」

十乃字はおもむろにテーブルに常備されているフォークとナイフを取り出し、食べる動作へと移った。

口にそれを運び、ゆっくりと咀嚼していた十乃字は、飲み込んだ瞬間にまたもや眩しいほどの笑顔を見せた。

「~~~~~!!!」

キラキラと瞳を輝かせながらも、その手は動作良くホットケーキを口に運んでいく。

小動物みたいで可愛いな……。

十乃字はいつもからは想像もできない可愛さに、正直ドキッとしてしまった。

だが、その前に。

自分の料理を美味しそうに食べてもらうと、こんなに嬉しいものなのか。

そんな初めての感覚が、俺の体に流れていった。

「ごちそう様だ」

早っ。

コイツとんでもないスピードで食ったな。

というかいつの間にか俺の分まで食いやがってる。

「ふむ、中々悪くなかったぞ」

「正直に美味しかったといえ」

「また手伝ってやらんこともない」

「分かった分かった。また今度作ってやる」

「10人前くらい」

「10人前!？」

こいつ、よっぽど美味しかったんだな。

また機会があれば作ってやるか。

「おっと、ここでお知らせだ」

「? なんだ？」

「早くしないと学校に遅刻してしまう」

「早く言え!」

十乃字は俺の目の前で仁王立ちし、学園に視線を流すと、ただ一言。

「『国立アーザック王族学院』だ」
ドヤ顔で言われても困る。

1 - 四 類は魔王を呼ぶ!?

『国立アーザック王族学院』

この世界でも名を響かせている、有名学院。

通う生徒は各国の次期魔王候補生、もしくは将来国を担うような仕事を希望する人たちの学院。

文武両道、好学尚武。

まさしく完璧な人間に近づくための学び舎である。

この学院の最も特徴的な所は、誰でも入学できるという所だ。

年齢も学歴も職業も身分も一切関係なし。

正に来るもの拒まず、だ。

そのため1年生、2年生のクラスが多く、それぞれ20組まで存在する。

しかし、この学院は留年制度などが無く、単位を落とすと即退学。そのため、3年生の数は普通の平均的学校と同数。

1年生、2年生で退学する人が多いためだ。

様々な施設が完備され、心技体、全てを培える学びの聖地であるこの学院を正式に卒業できたものは、この世界でほとんどが名を轟かせている。

……まあ、全部十乃字からの伝聞なんだが。

そんな学院に今日から通う事になった俺は、期待1分不安9分といったところだ。

羅生門の下人も逃げ出す数字だ。

「どうかな、この学院の印象は(問)?」

俺は学院のとある応接室にいる。

あの後、十乃字と職員室に向かい、担任に会うことにした。

そして、今話している方こそが俺の担任となる人だ。

「表裏言葉（名）。担当は魔法学（教）。君のこれから所属するクラスを担当になるから、よろしくね（笑）」

痩せがたで長身。

白髪の長髪で、髪と相対するような黒いスーツとネクタイが特徴の人だ。

「こちらこそ宜しくお願いします」

俺も急いで頭を下げると、先生は突発的に質問をしてきた。

「で、君が魔王の代理人になるわけだが……自信はあるのかい（問）」

実をいうならば、俺が魔王の代理人を務めると言う事はもうこの職員全員が知っている。

十乃字が、魔王がどうなり、どういう意図があったのかを説明したからである。

何れ、俺が代理人になったことは各地で知られるようになるだろう。

だけれど、しかし。

「自信は正直のところ0です。魔王の代理人など務まるなど思いません。けれども、俺も魔王にならなければならぬ理由があります。できる限るのことはやり尽くそうと思います」

これが。

俺の本心だ。

「はははっ、そうかい（笑）。まあ、この学院は『魔王』を目指すものも少なくないけどねえ（笑）。おっと、雑談をしている時間はあまりないね（焦）。取りあえず、僕のさっき渡した制服はもう着てもらってるし、そろそろ教室に向かおうか（急）」

先生はそう言って立ち上がると、応接室の扉を開き、俺を教室まで案内してくれた。

長い廊下に、靴音を響かせながら。

急ぎ足で教室に向かっていった。

まあ、しかし教室に行くときの俺は、少なからずやあることを楽しみにしていた。

『友達』

俺はそれを作れる可能性があったことにやや楽しみにしていた。元の世界での俺は、生い立ちのせいで周りから敬遠されてきた。クラスメイトにも、担任にも。

いつも遠目でみられては一人でいた。寂しかった。

胸が苦しかった。

たまに目頭が熱くなり、首元が苦しくなつて、一人泣いたこともあった。

それが俺の小学生時代。

中学生になつてもあまり変化はなかった。

ただ俺が、一人に慣れただけで。

何も変わらなかった。

田舎の学校だったから、小学生のころと同じやつばかりが中学校にいた。

クラスメイトもほとんど同じ。

だから、俺に友達なんてものは出来なかった。

だけど。

しかし。

今回は違う。

まったく違う。

全てが違う。

生い立ちなんてここには知るものもない。

俺がどんな奴で、どんな過去をもっていて、どんな生活をしてきたなんてみんな知らない。

俺は。

友達ができるかもしれないのだ。

そんなポジティブなことを考えながら、俺は一人胸を弾ませてい

た。

そして、遂に教室にたどり着いた。

教室の扉についている札には、筆で書かれた文字がある。

『七年七組』

それが今日から俺の通うクラスで。

この世界での新たな学園生活での第一歩であった。

先生が扉を開け、俺も追う様にして教室に入ってしまった。

「おっ、転校生か？」

「入学式からそんなに日がたってないわよ？　なんでこんなときに

？」

「何か事情があるんじゃないの？」

教室はざわざわとざわついていた。

「ハイ、静かに〜（注）。今日は皆さんにお知らせがあります（伝

」

つ、ついに来たか……！

ヤバい、緊張してきた……。

「今日から編入してきた、回座宗谷くん。なんとあの無間様の代理

人を務めていて、無間様同等の魔核スキルを持っている、次期魔王候補の

一人だよ〜（笑）」

！？

「！？」

「！？」

「！？」

クラス全員が騒然となった。

かくいう俺も先生がいきなりの暴露で啞然としていた。

「ま、マジかよ……無間様と同等って……」

「代理人ってどういうこと……まさか無間様の代わりを務めてたりするの？」

「次期魔王候補って……あいつを下手に怒らせない方が良くない……」

や、ヤバい！

前の世界とは違う空気でみんなと俺の距離が離れていく……！

「では、一時間目は魔法学なので、皆さん教材を準備して10分後に演習場に集合ですよ（伝）」

そういつて先生は教室からでていった。

先生……いつかは知られることでも早すぎる……。

取り残された俺は、先生に予め教えてもらった席にとぼとぼと向かい着席した。

一番後ろの窓側。

普通なら特等席として喜ぶところだが、まったく喜べないのが現状。

机の中には先生が先に入れてくれたらしい教科書一式などが入れられており、俺は『魔法学？』の本を手に取り、先に軽く中身を閲覧していた。

「だ、だれか話しかけてみるよ……」

「いやよっ、私まだ死にたくない……」

「絶対俺はかわらねえぞ……」

ああ、もうダメだ。

このクラスでも友達はできそうにないや。

俺は机で少し残念そうにうつむいている時だった。

「……次……移動」

隣で本を抱えている少女が俺に話しかけてきた。

小柄で幼い顔。

メガネをかけ、目の冴える銀髪のショートカット。

雪のような白い肌、純粹無垢な瞳。

無愛想な表情で、見た目はさながら文学少女と言ったところか。

普通か美少女と聞かれたら、断然美少女の部類に入る可愛いその少女は。

俺に声をかけてきた。

「えっ、あ、移動？」

いきなり言われたが、そういえば表裏先生が演習場と言っていた。

というかその場所すら教えてもらっていない俺であった。

気づけばクラスの全員はとっくに演習場に向かったようで、教室には俺とこの少女しかいなかった。

「……案内……する？」

「あ、その、えっと」

急な親切に驚いてしまった。

というか親切という優しさに俺はあまり慣れていない。

幸運、幸せのようなものに耐性が無い。

あ、ヤバい。

今にも涙腺が崩壊しそう。

逆境には強い方だと思うが、こういうタイプは大抵が成功者にはなれないと自分でも分かっている。

つまり、俺はこの親切をどう受け止めようか、どう感じようか、どう返答するか、皆目見当がつかない。

「……こっち……」

少女は俺を案内するように、教室の出口に立ち、俺に視線をなげた。

「え、あつ、うん」

状況に流されるように俺も席を立ち、その後をついていく。

静かな廊下を、こんどは少女と俺は歩いている。

一定のペース、一定の歩幅、一定の靴音。

……………。

沈黙……………。

……………気まずい……………！！

ここはアレだろうか、自己紹介した方が良いのだろうか。

しかし、いきなりそんな馴れ馴れしくしたら気持ち悪がられるのではないか……………。

「……ディーナ……………」

「えっ？」

「……ディーナ・アレクサンドル・グリーンナ……………私の……………名前……………」

外国の人であった。

まあ髪の色からは大体想像はできたが、名前からだともロシア人であろうか。

「俺は回座宗谷、親切にしてもらって本当に助かるよ」

ロシア人はみんな親切なのだろうか。

だとすると移住するならロシアだな。

そんな簡単な自己紹介を済ますと、演習場と思われる広い場所が見えてきた。

「……………ここ……………演習場……………」

演習場。

と、いつても森みたいな場所であった。

森林が生い茂り、まるでサバイバルゲームをするのに打って付けな。

もちろんフィールド全てが森林な訳ではない。

オリンピックでも開催できるほどのグラウンドに、何故か射撃場施設にとことん力を入れていた。

「おや、グリーナさんと仲良くなったのですか回座くん（問）？」

表裏先生は点呼をとっているようで、片手にボードを持ちながら、いましてから来た俺たちを珍しそうな目で見てきた。

クラスのみんなは、もう演習場に集まっていたが、俺たちがきた瞬間、みんなの雑談が一斉に止まり、こっちに驚きの視線を向けていた。

……………グリーナさんに悪いことしたかな……………俺といっしょにいるせいで変な視線を向けられて。

「同じ候補生同士、仲良くしてくださいね（笑）」

……………え？

同じ？

同じって何が同じなんだ？？

「ひよ、表裏先生……………同じ……………とは？」

間髪開けず、俺は即座に聞き返してしまった。

今日初めて会ったグリーンナさんと、俺の何が同じなのだろうか。
そんな疑問を投げつけると、表裏先生は何を言っているのだろうか？
っと、いう表情で。

ただ質問通り。

端的にこう答えた。

「えっ、まだ聞いてませんでした（驚）？ グリーンナさんは現ロシア魔王の一人娘こと、回座くんとは国が違っけど、次期ロシア魔王候補の一人ですよ（笑）」

1 - 伍 危機一氷

『魔王』

ここで、魔王の役職について再度確認したいと思う。

魔王というのは、いわば国の頂点トピックに立つ人間の役職名である。

政治から軍事など、様々な仕事を担い、絶対的な決定権を持つ。

独裁者でも支配者でもない。

国の代表、国の象徴なようなものだ。

そして、主な仕事の1つ。

『脅し』

この世界でどんな武器、兵器など物ともしない『魔法』。

その『魔法』使うための絶対条件、魔核スキルが優れてなければいけない。

い。

魔王は絶対的な力を他国に見せつけ、『自分の国に攻めたら大変なことになるぞ』という意思表示を行うのだ。

侵略者プレデターからの防衛のため。

つまり、様々な国にも魔王という役職が存在する訳だ。

小国にも大国にも。

弱国にも強国にも。

日本に限った話ではないのだ。

何処の国にも。

魔王は。

存在する。

「ぐ、グリーンナさんって……ロシアの魔王候補だったんだね……」
「……………うん……………」

俺とグリーンナさん（さん付けはいらないうや、ディーナで呼んで欲

しいなどと言われたが、まだそれほど親しい関係でもないし、俺の幸せメーターが振り切れそうなので丁重にお断りさせてもらった。今は演習場で体育座り中。

今日の魔法学は『マナの基本的操作』ということで、クラスの一人ずつがマナを操作し、遠くにある木の的を壊していく、というものだ。

そもそも、『魔法学』というものは、魔法についての理論、構造、使用法など、魔法についての様々な事柄を学んでいくという、この世界では必須科目の1つである。

今回は簡単な練習法で、魔法を使用する感覚を体で覚えるのが目的らしい。

ちなみにマナを操作・変換し、そのあと、どんな魔法になるかは人それぞれで違う。

炎を創り上げ、的を燃やそうとする者もいれば、石を浮遊させ、的にぶつけて物理的に壊すなど、方法は十人十色。

順番は演習場に来た順、ということなので、俺とグリーンナさんはかなり後の方だ。

「はあああ、燃える！」

クラスのある男子がそう叫びながら両手を的に向けて、魔方陣が現れ、そこからかなり弱めの炎が的に向かって放たれていた。

「マナの操作・変換は感覚的に行ってください（注）。その際に、魔方陣などを想像して、魔法をより感覚的に想像しやすくするようにすること（注）。魔方陣は、あくまで補助輪のような役目ですから、難しい魔法、失敗しやすい魔法などにしかほとんど使いませんから、早く無くても魔法が使えるようにしてくださいね（伝）」

表裏先生は魔法について説明しながら、生徒の様子を見ていた。

あれが魔法……。

魔法自体を見るのは初めてではないが、こういう風に落ち着いて客観視するのは初めてであった。

未だに魔法という存在に現実感を覚えていない俺だが、こういう

風に見ていると否が応でも魔法の存在を認めざるおえない。

「魔法を使う際、重要となるのが魔核スキルです（伝）。難しい魔法、威力の高い魔法などはマナを大量に消費するので、大量のマナを操れるよう、魔核スキルをしっかりと鍛えましょう。魔核スキルはしっかりと訓練を積みめば、少しずつ強くなっていけますからねー（頑）」

魔核スキル。

魔法を使用する際の基礎中の基礎、基本中の基本。

俺は確か前魔王、無間の魔核スキルを持っているが……。

一体どれほどの力なのか、興味が無いと言えば嘘になる。試してみたいと思う気持ちさえある。

「グリーンナさん、どうぞ（伝）」

気付けば次の順番はグリーンナさんであった。

「じゃあ、頑張れ」

細やかな声援を送ると、グリーンナさんはやや頬を朱に染めてやや速足で指定位置に行った。

調子が悪いのだろうか？

もし本当に具合でも悪ければ、休んでいた方が……。

しかし、そんな考えは次の時点で一転された。

「……………んっ……………」

グリーンナさんが両手を的に向け、静かにまぶたを閉じると魔方阵が出現し、なんとそこから巨大な氷柱が的目掛けて延びていった。

的を勢いよく貫かれてしまった。

……………。

啞然。

開いた口閉まらない。

万力でも閉まらないだろう。

「さすがは次期ロシア魔王候補生、魔核スキルはかなりレベルが高いです

ね（褒）」

今先程の事なのに忘れていた。

グリーンナさんは……。

ディーナ・アレクサンドル・グリーンは次期ロシア魔王候補生の一人である事を。

グリーンさんはすぐに俺の元に寄って来て、

「……………頑張った」

と一言。

大変頑張りすぎです。

魔王候補生ともなると、やはりここまで常人とは格が違うのか。しかし、だからこそ。

グリーンさんも周りから避けられている。

俺と同じように。

クラスから。

恐れられている。

「では、次、回座宗谷くん（呼）」

「あ、ハイ！」

ついに俺の番が来た。

魔法は初めてだが、演習を行う前に一通り先生が基本を教えられた。

兎に角、俺は教えられたとおりにするだけだ！

一応これでも魔王候補生としては十分の魔核スキルを持っている俺だ。

いきなりグリーンさんまでとはいかなくても、それなりのものはできるはず！

「では、的を破壊してください（伝）」

俺は両手を前に突き出し、的に狙いを定め、そしてゆっくりと思い出す。

……………感覚的に……………イメージ……………想像……………そしてそれを……………創造する……………。

脱力。

とにかく力を抜く。

全身が液化、そして気化する様な感覚で。

余計な力は邪魔になる、一点に集中する。

……！

「はああああ！！」

爆発しました。

爆発といつても『ぼーん』『や』『どつかーん』という可愛らしい擬音のつくようなコミカルなものではない。

俺が右手を的に向け、エネルギーを放出しようとした瞬間に半径3mほどが小規模の爆発にみまわれた。

情けない恰好で地面を這い蹲ったままで、俺は今にも野垂れ死にしそうな感じに倒れてました。

「大丈夫かい回座くん（爆）？」

表裏先生はそう心配してるように感じられる字面の言葉で問いかけてきたが、思いつきり腹を抱えて大爆笑していた。

（爆）発だけに（爆）笑しているという事だ。

笑えねえ……。

魔法ではなく、今回学んだ事は『爆発してもドリフのように頭がアフロにはならない』というくらいだ。

「……大丈夫……？」

クラスメイトも遠目で見、担任は爆笑している中、グリーンナさんだけが心配して近寄ってきてくれた。もう止めて……そんなに親切にされると本当に泣きそう！！

ちなみに、俺の体は全然大丈夫じゃない。

もろドバドバ血が出ることが見なくても分かる。

「……先生……宗谷……保健室……連れて行く……」

「あっ、じゃあグリーンナさんお願いします（爆）」

いつまで笑ってるんだよ。

よく先生になれたものだ。

俺はグリーンナさんに肩を貸されるような形で保健室まで行くことになった。

やっぱり良い子だな……。

それに比べて俺はなんて情けないことか……。
演習場から出て、また長い廊下になって二人つきり。

ロマンチックとは言えないが、俺は今、とても新鮮な気分だ。
こうして、人に助けられるというのは。

こんなにまで……嬉しいのか。

新鮮な気持ちでもあるが、何かに満たされる気持ちも感じられる。

これが………幸せというものだろうか？

そんな感傷に浸っている時、グリーンナさんはある質問を出してき
た。

「……私と……宗谷……って……友達……に……なれる……かな……
……？」

幸せゲージが吹き飛んだ瞬間であった。

えっ、今なんて!?

俺と……友達!?

その思いの寄らない質問に、俺は心の中で何かが暴れ出しそうに
なっているくらい嬉しかった。

俺はグリーンナさんの方を振り向くと、グリーンナさんは恥ずかしそ
うに俯いて、耳まで真っ赤に染まっていた。

「と、と、友達か〜! で、でもグリーンナさんって王族の人だし、
なれる自信ないなあ〜!」

そんなおどけた事を言いつつ、俺はもの凄く嬉しい気持ちで、頭
をかきながら照れていた。

嬉し過ぎる故の、心にもない照れ隠し。

そういつた感情も気持ちも。

そんな照れ隠しの言葉さえも。

次の瞬間で全て消えた。

「………そうだよ………ね………」
暗く、重く、深く。

グリーンナさんの次に出た言葉は、さっきとまったく違う。
悲しみ。

逃げようとしている道を氷柱で塞がれたり、階段を氷柱で塞いだりなど。

とにかく俺は抵抗できないまま、誘導されるままに走った。
な、何でだ!?

何か気に障るようなこと言ったかな!?

まさかさっきの照れ隠しを聞いてむかついたのか……!

しかし、謝罪する余地などはなかった。

俺はアツサリ追い詰められ、案の定行き止まりの場所へと誘導されていった。

学院で特別教室ばかりで、今現在、ほとんど人気の無い場所まで。

「……安心……して……できるだけ……苦しまない……ように……殺^やる……」

可愛い顔と声してとんでもない事を言うなあ。

しかしそんな陽気なことを考えている場合ではない。

はあ、それにしてもなんかこの世界に来て死にそうになる事多いな。

だが、俺もまだ簡単には死ねない。

抵抗するだけの力を、俺は秘めているのだから。

抵抗できるなら。

生きてやるさ。

格好悪くても、惨めでも、愚かでも。

見つとも無く生に執着してやるさ。

兎にも角にも、俺は真^ま面^もな魔法はまで使えない。

だが、土壇場になって力を使えるかもしれない。

よくあるだろう? 主人公がやられそうになると、内なる力が覚

醒するとか、急に有り得ない力がでるとかのご都合主義。

俺もなれるか分からないけど、責めて自分が主人公と思っ込んで抗ってやるか。

だが、そんな自分の考えをまとめていた時に皆さんご存じ。

十乃字小夜さんが登場した。

登場というより、声がした。

……………えっ？

「おい、お前。何を勝手に死にそうになっている。まったく、手間をかけさせるな」

俺の目の前にあった氷柱で塞がれていた氷の壁が次々と切り崩され、十乃字はその姿を現した。

悠然に。

凜と。

その巨大な大剣を輝かせ、黒髪を靡かせ。

推参した。

……………かつけえ……………。

何処のヒーローだよと言いたかったが、ここではこの言葉は飲み込んでおこう。

「……………誰……………？」

「答える義理はない」

でました名台詞！

十乃字はすかさず飛び上がると、そのまま大剣を軽々と宙で振り上げ、そのまま斬り込みにかかった。

だが、瞬時にグリーナさんの右腕は突如氷で包まれ、その右腕を盾にし、十乃字を豪快に振り払った。

「やはり一筋縄ではいかないな」

十乃字はやや楽しそうに、愉快そうな顔をしながら呟いた。

楽しむな。

お前は戦闘狂かよ。

「おい十乃字！ これはどういう事なんだ!？」

お前が楽しむのは勝手だが、事情が分からないまま俺をほってもらっては困る。

しかし、この後。

十乃字の返事を聞かなければ良かったと思うのは。

時すでに遅し、だった。

「簡単な話だ……こいつが……ディーナ・アレクサンドル・グリー
ナが暗殺者の一人ということだ」

1 - 六 氷降って地固まる

『アサシン暗殺者』

この世界の魔王達が厄介としてしている問題の1つ。

『魔王』つというのはもうご存知の通り、国の頂点トピックであり、絶対な人間。

そして、圧倒的な力を持ち、最低クラスの魔王でも、1人で小国の軍隊くらいなら容易に潰せる。

魔王はある意味、その国の『最強者』でもあるのだ。

最強者で最恐者。

常人とはかけ離れている存在。

それが魔王の定義であり、魔王の概念だ。

だが、その最強者も常に無敵な訳がない。

人間、隙は必ず生まれる。

病気で弱つてるところ、仕事で忙しいところ、もっと言えばトイレで用を足している時や入浴中の時、寝ている時なども隙だ。

そんな隙を突き、敵国の……侵略者ブレデターの暗殺者アサシンは魔王を殺してくる。

侵略しやすいように。

自分の国を栄えさせ、豊かにするため。

他国を喰う。

侵略者ブレデターは。

暗殺者アサシンは。

魔王を殺す。

「……グリーンナさんが……暗殺者……？」

初めてクラスで話しかけ。

優しくしてくれて。

友達になろうとまで言ってくれたグリーンナさんが……。
暗殺者。

俺を殺しに来た。

俺を葬りに来た。

暗殺者。

頭が回らなかった。

その事実を理解しようとしたくなかった。

全身から込み上げてくる何らかの感情を認めないまま、動きを止めた。

「何を突っ立つてる、隙を見せるな。殺されたいのか」

呆然と突っ立つてる俺に比べ、十乃字は落ち着きながら、相手を威嚇するように睨めつけながらその巨大な大剣を構えていた。

「……邪魔………そこ………退かないと………殺す………」

グリーンナさんはその威嚇に臆する様子はなく、真顔で、平坦に、普通に、そこに佇んでいる。

「お前が私を殺す？ 魔王候補生でもよくそこまで自分を過大評価できるのかと逆に感心したくなる」

「……… 『氷姫締結』………！！！」

またもやあの魔法。

『ツンドラバーン氷姫締結』。

書物室でこの魔法を俺は見たことがあった。

確か、空気中の水分子の運動をマナで停止し凍らせ、様々な氷を作り出す氷系中位魔法。

手元の魔方陣から千変万化、変幻自在に氷を生み出しす恐ろしい魔法。

氷系下位魔法と違い、氷の精製速度、操作率までが段違いだ。

本来、この学園ではスキル魔核を訓練で進化させ、カリキュラムレベルアップ参年から中位魔法を教えている。

しかし、そのはずなのに。

グリーンナさんはいともたやすく。

それを使用していた。

さすがは次期ロシア魔王候補生と言ったところだ。

今の今まで俺は、あの魔法からできた氷柱に、何度刺殺されようとなつたか。

その魔法が、今、氷柱ではなく。

魔方陣から生まれたのは……氷像の騎士であった。

「ほう、氷をそこまで巧みに操れるとは。さすがは魔王候補生と言つておこうか」

「……長期戦は……私に……不利……一気に……片を付ける……！」

氷像の騎士は、見た目では想像も出来ないほどの速度で床を滑る様に走りだし、気付けば十乃字の首に、腰に下げていたはずの剣で斬りかかろうとしていた。

騎士の全長は約2m、全身に冷気を帯び、恰好は西洋の騎士を想像してもらつて構わない。

問題なのは。

その2mもの重量級騎士の速度が。

早すぎる。

「……！」

十乃字はかろうじて大剣で一撃を受け止めたが、騎士の斬撃の雨は止まない。

騎士の

刃と氷刃の斬撃音がここまで聞こえる。

騎士はその巨体で上方から十乃字に斬撃を浴びせているのに対し、十乃字はその速度についていけないまま防御に徹している。

防戦一方。

騎士の一撃一撃は、離れて見ている俺でも分かる。

鋭く、重い一撃だということに。

「ふむ……なるほどな、聞こえるか馬鹿者」

「恐らく俺のことだと思うのでスルーしたいのは山々だが、そんな状況じゃないから返事してやる！ どうした！」

「おそらくこの女、騎士を操っている間はその氷柱も出せないようだ」

両手で支えている大剣で騎士の斬撃を受け止めながら、十乃字は焦りながらもそう言った。

確かに、今グリーナさんは両手で2つの魔方陣を作りながら、騎士を操っていた。

「氷のここまでの巧みな操作、やはり集中力がいるのだろう。恐らく騎士を操作している間、あの女は動けん。お前はその間に……あの女を殺せ」

！？

予想だにもしない言葉が飛んできた。

俺が。

グリーナさんを。

……殺す。

「迷うな！ 暗殺者は殺す！ 生かしておいたらまたお前を殺しにくる！ 僅かな禍根も残さず殺すんだ！」

殺す。

俺は。

殺すのか？

グリーナさんを。

この手で。

迷うなと言われても迷う。

俺は今まで偽善に会ってきたから分かる。

あの優しさは………偽善ではなかった。

本当に心の底から、純粹に、汚れなく俺に親切を向けてくれた。

そんな初めての親切を向けてくれた彼女に。

俺が手を下すなんて。

辛すぎた。

しかし。

そんな戸惑いに迷っている時に。

十乃字は 斬られた。

十乃字の背中からは、少しずつ血が滲みだし、その背中の傷跡は痛々しく見えてきた。

「!?!? 十乃字!?!」

俺は本当に馬鹿だ。

十乃字の言った通り、馬鹿だった。

何故気付かなかったのだろうか。

あんなに堂々と見えていたのに。

グリーナさんの使用している魔方陣は2つ。

つまり。

騎士が。

もう一体いても。

おかしくない。

勝手に2つの魔方陣を使って一体の騎士を操ってるなんて、俺が勝手に思い込んでいただけであった。

巨大な氷柱に隠れていたそのもう一体の騎士は。

無感情に。

無感情に。

ただの動作として。

十乃字をいきなり背後から斬りつけていた。

「!?!? ……私としたことが!?!」

十乃字は痛みで顔を歪めそのまま倒れるようにひざまずに跪いたが、すぐに大剣を一旦投げ捨て、片足で床を思いつき蹴って走りだし、2体の騎士から距離を取った。

「……………負傷者一名……………魔王代理人一名……………楽に……………殺せる……………」

グリーナさんは相も変わらない無表情で、ゆっくりと歩み寄ってきた。

俺たちを殺そうと。

ゆっくりと。

近寄ってくる。

だが、俺はそんな事に恐怖を感じることは出来なかった。恐怖を心に入れる隙間がない。

今の俺の心の中は。とにかく乱れていた。

十乃字が斬られたのも主な理由だが。

もう一つの理由は。

女の子が……。

「……………女の子がそんな事してはいけません!！」

ここで話すなら、俺は魔王城も書物室である一冊の興味深い本があった。

『子供の遊び全集』

正直、この本を手にとったときは読まなくても良いのではないかともし本棚に戻そうとも思ったが、その時の俺は情報に飢えていた。

まあ今もだが。

一心として、俺はその本を開いたとき。

そしてそれを読んだとき。

俺は1つだけ。

1つだけだが。

1つの魔法が使えたのだ。

『ストレート魔拳』

この魔法は、魔法よりも子供の軽い遊び技なのだが、内容はこうだ。

【ストレート魔拳 : マナを操り、拳にエネルギーを纏わせ、葉っぱに

触れる。相手より遠くに葉っぱを飛ばせれば勝ち】

と、いう単純な遊びだ。

単純で簡単、実にシンプル。

だが、だからこそマナ操作も簡単。

マナを変換しなくて良い。

マナを難しく操作しなくても良い。
単純に、マナというエネルギーを。
拳こぶしに纏まとうだけだ。

そして、対象物にぶつけるだけ。
操作・変換が子供以下の俺でも。

この魔法は 使える。

俺は拳こぶしにマナを纏まとい、そのまま騎士を殴り。

粉碎した。

粉々に。

氷の欠片にしてやった。

綺麗な光輝く欠片に。

「！ なんて……………騎士……………硬さは……………鉄並……………のはず……………！」
無表情のグリーナさんも、さすがに騎士を壊されるところを見た瞬間、表情に少しの焦りが見えた。

片方の騎士が倒れると、グリーナさんの手元の魔方陣は1つ消え、そして騎士の氷の欠片は霧のようになり、空气中に消えていった。

「……………魔法……………使えない……………はず……………！」

「誰も1つも使えないなんて一言も言っていない。俺が唯一使える魔法、『魔法』……………」

「魔法……………子供向けの遊び魔法だが、さすが無間様の魔核スキルなだけはある。威力が桁違いだ」

十乃字もやや驚いているような顔をしている。

「……………まだ……………負けてない……………！」

グリーナさんはもう一体の騎士を操作し俺に斬りかかろうと、さらには片手でもう一つ魔方陣を創り上げ、またもやあの変幻自在の氷柱を繰り出してきた。

騎士の持つ剣こぶしは俺の心臓に、巨大な氷柱は俺の頭目掛けて貫こうとしていた。

だが、無駄だ。

騎士の動きと氷柱の軌道は、グリーナさんの焦りのせい動きが

単調すぎる。

ただ真っ直ぐに突っ込んできてるだけ。
なら。

その軌道上を。

拳こぶしでぶん殴れば良い……！

俺は両拳に『魔拳ストレット』を発動し、そのまま。

ぶん殴った。

「おらああ！！」

騎士と氷柱は案の定、轟音を轟かせ、崩れていった。

粉碎され、跡形もなく。

崩壊。

両方とも、綺麗な霧となって消えていった。

名前の通り、ストレットなストレットパンチ。

変化の無い技なんて怖くなどない。

「……………！！」

グリーンナさんは一瞬ひるんだが、更に魔方陣を創り上げようとした。

また騎士か、それとも氷柱か。

俺は次の攻撃に対して構えた。

が、その行動は意味は空振りに終わる。

グリーンナさんが 倒れたからだ。

ふらりと。

全身の力が抜けたように。

冷たい床に倒れていった。

「……！ グリーンナさん!？」

俺はグリーンナさんの元に駆け寄ると、グリーンナさんは息を乱しながらかなり疲れきっていた様子で気絶。

「……別段体力がない奴だったんだろう。魔法を使えば使うほど、難しければ難しいほど疲労がたまる。単に疲労が限界にきただけだろっ」

十乃字は背中から血を先程より滲ませながらこっちに近寄ってきた。

「お、おい！ お前は歩いて大丈夫なのか！？」

「問題無い、これ位すぐに完治する」

化け物がここにいた。

こいつは妖怪の類か？

「それよりこの女だが……放っておくには危険すぎる。やはり今すぐにも殺す」

「帰ったら好きなだけホットケーキを焼こう」

「さなくても良いだろう。一旦保健室に連れて行き、回復後、尋問を開始しよう」

ふう、甘いものに目の無い奴だが、これから説得する際はこれで行こう。

さて、早くグリーンナさんを運ばなければ……

俺はグリーンナさんに肩を貸すような形になりながら保健室に連れて行くことになった。

……よくよく考えれば、現実問題、俺は演習場で怪我をして、グリーンナさんに連れて行って貰っていた途中なので、俺もそれなりに怪我に痛みが走っている。

ちなみに、十乃字は『今日は家庭科で甘味物の作り方を実習のために学ぶ日だからアウト』と言い残して教室に帰った。

猫の手ならぬ十乃字の手も借りたいが、あいつは戦闘くらいしか役に立たないのか……。

あいつの頭の中の等式は甘いもの<甘いもの以外で構成されているな。

ところ変わって保健室。

その後、俺とグリーンナさんは保険医の先生に演習場で負った怪我

と言ってそれなりの手当てを施^ほしてもらった。

「……………」

グリーナさんは只今ベッドで絶賛睡眠中。

ちなみに、俺はその近くで椅子に腰かけながら様子見。

いや、別に女の子の寝顔見たさで残ってるんじゃないぞ？

ただ保険医の先生がすぐに出張に行ってしまったから、ちょっと心配になって見守っているだけだ。

……………」

それにしても、こんなに小柄で華奢な子に俺はさっきまで殺されようとしていたなんて。

想像もできない。

思いにもよらない。

俺が過度のM^マなら興奮しているところだが。

生憎^{あいにく}、俺はM^マではない。

「……………なんで……………私……………が……………ここに……………いる……………」

気付けば、グリーナさんはいつの間にか静かに目を覚ましていた。体をおこし、そのまま俺を見た瞬間睨むようにそう言った。

「……………殺さない……………なら……………私……………が……………！」

魔方陣を組み上げようとしていたが、今の彼女の状態では到底無理だろう。

その前に、俺には言う事があるしな。

「別に、殺す気は無いし、殺される気も無い。ただ、1つお願いがあるんだ」

「……………」

グリーナさんはまだ睨み付けているが、気にせず言うてやる。相手の心情を無視してこの言葉を投げつけてやる。

こんな文面じゃ俺がさながた、M^マというよりS^{サド}っぽいな。

まあそんな事は今はどうでもいい。

ここから先は、大切なことだ。

大切に。

重大な。

返事。

「俺と友達になってください」

俺はグリーンナさんと友達になってやる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7432z/>

魔王代理人の日頃

2011年12月29日13時51分発行